

おやすみ、と一ほく。

kueru1943

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

22／09／25に他サイトで上げた作品。

なんだか耳が痒そうなきりたん。そんな彼女を見て、ウナは耳かきを提案する。

おやすみ、とーほく。

目次

おやすみ、とーほく。

「うーん……」

読んでいた漫画本から目を離し、悩ましげに呻く友人の方を見遣る。

声の主である友人——東北きりたんは、小指で耳をかつぽじっていた。言葉通り。比喻ではなく。

「とーほく、それ女の子的にあんまりよろしくないぞ」

「んえっ!? み、見られてしまいましたか……」

それなりに恥ずかしかったのか、指を引っこ抜きながら気まずそうに言葉を続ける。

「その、急に耳の奥が痒くなつてしまつて、不可抗力といえますか」

まあ、それ以外に指を耳に突っ込む理由はないと思うけど。

ここでふと、最初に聴こえた呻き声がやけに悩ましげだったことに気づく。少し痒いくらいなら声を上げる必要もないはず。これはもしや。

「とーほく、まだ痒い?」

「ええ、まあ。どうやら指では届かない位置にあるようで」

よしきた。

「じゃあ私が耳かきしてあげる! 道具持つてくるからちよつと待つてー!」

「えっ、ちよつとー!」

親愛なる友人が困っているのならば、手を差し伸べるのが友の務めだ。これは善意であつて、決して興味本位などではないぞ。うん。

*

「耳かき棒と綿棒、どっちがいい?」

包丁の髪飾りを外し、私の太ももに頭を乗せたとーほくに尋ねる。「どちらでも構いませんよ。とにかく痒みをどうにかしてほしいです」

「おっけー、じゃあ耳かき棒でやつてこうかな」

……

「鼓膜破ったらごめんね?」

「ひえっ、怖いこと言わないでくださいよ……」

そんな脅しも挟みつつ、耳の中の掃除を始めていく。本当は耳の外からやっていくのが良いらしいけど、その間ずっと痒いままなのも可哀想だし。

「どこが痒い?」

「下側、足の方です。あ、もう少し奥」

「(´▽`)?」

言われたとおり、棒を少しだけ奥にやると、

「んあっ、そこです!」

良い反応が返ってきた。確かに少し深い位置だし、指でどうにかするのは難しいかも。

「よしよし、力加減大丈夫?」

「はい、ちょうどいいです……」

どこか張り詰めていた表情が一気に緩んでいくのを見て、思わず私の顔もほころぶ。気持ちよさそうだ。

しばらくカリカリと搔いてやると、満足した顔になっていくのがわかった。

「はあ……すつきりしました、もう平気です」

「それはよかった! じゃ、改めて入口の方から掃除していくね」

「……本当にやるんですか?」

なぜ怪訝そうな顔をするんだろう。

「当たり前でしょ? なんのために耳かきしてると思ってるの?」

「わ、私を痒みから救うためではないんですか!?!」

「逆に考えるんだ、痒みから救ってくれた恩人への対価が耳かきなら安いもんだろ?」

「最悪鼓膜を破られる可能性があるんですよこっちは!」

うるさい奴だなあ。

しかし、文句を言うわりに暴れたりしないのは利口だ。生殺与奪の権をどちらが握っているか、よく理解している。

「まあまあ、私も最大限気をつけるからさ。力はこんなくらいでいい

？」

「気をつけてもらわなきゃ困りますよ。加減はまあ、ちょうどいいくらいです」

ようやく観念してくれたようだ。太ももにかかる重さが少しだけ増える。

カリカリ、カリカリ。

さっきまで言い合いなんかして気づかなかったが、とーほくの耳はかなり柔らかい。耳たぶが柔らかいくらいならよくあるけれど、耳の縁まで柔らかいのだから驚きだ。

こうして耳を綺麗にしてやってるわけだし、少しくらい弄ったって罰は当たらないだろう。これも役得というやつだ。ふにふに。

そんな恩着せがましいことを考えていると、とーほくが何か言いたそうな顔をしていることに気づく。

「どうした？ くすぐったい？」

「ああいえ、そういう訳では無くてですね……」

口をもごもごとさせている。なにか秘密の暴露でもしてくれるのかな。

「その、私の耳、どれくらい汚れてますか？」

なんだ、そんなことか。そんなに恥ずかしがることでもないのに。

……いやしかし、何気に回答に困る質問だぞ、これ。

「……………普通、くらい？」

「な、なんですかその間は」

しまった、バッドコミュニケーションを踏んだかもしれない。

実際のところ、とーほくの耳は綺麗な方なのだと思う。入口付近にほとんど汚れは無かったし、奥の方にいくつか気になるのがあるな、といった程度だ。

「でも、結構綺麗だと思うよ。マメにやってるの？」

「まあ、二週間に一度くらいでしょうか。そんなに頻繁にはやってないですね」

頻度を決めてやっているだけ私より偉いな。まさかとーほくに人間力で負ける日が来るとは。

カリカリ、カリカリ。

「よし、こんなもんかな」

覗いて見える汚れはあらかた取り終わって、綺麗だった耳がさらに綺麗になった。我ながら良い仕事をしたと思う。

でも、まだ最後の仕上げが残ってるよね？

「ありがとうございます。じゃあ」

「あ、ちよつと待って」

反対側を向こうとするとーほくを制止して、彼女の横顔に私の顔を近づける。

「ふえっ!? な、なにを——」

そのまま、耳に向けて、

「ふ~~~~」

「あひゃあっ!?!」

ゆっくりと息を吹きかけた。

「あっははは！ 変な声——」

「もう！ 急になにするんですか!」

耳を真っ赤にしながらぶんすか怒っている、想定以上の反応が見られて大満足だ。

「ふふっ、ごめんごめん、悪かったよ」

謝ってもなおぶんぶんしているとーほくに、改めて反対を向くよう促す。

*

さつきまで太ももに圧されていたせいか、反対側の耳も赤くなっていた。

熱を持った耳は、先程までとはまた違った柔らかさをしている。これはこれで——

「音街、さつきから気になってたんですが」

「ふえっ?」

完全に意識を逸らしていたので、思わず変な返事をしてしまう。

その、と言葉を置いてから、とーほくは言った。

「なんでずつと私の耳揉んでるんですか?」

「っ!？」

バレていたとは。

まさか感触を楽しんでいたと言う訳にもいかず、なんとか誤魔化そうと弁を弄する。

「あーえつと、そう！ これは耳のマッサージ！ よく言うでしょ？ 耳にはツボがいっぱいあるって、確か妊婦さんが眠ってるみたいな形で、」

「妊婦ではなく胎児だったような気がしますが……」

くっ、物知りめ。

「……嫌だった？」

「いえ別に、むしろ——じゃなくてっ、少し気になっただけです」

とーほくが優しく助かった。それに、膝枕で顔が見られないのも都合がいい。誤魔化した焦りと恥ずかしさで、きっと私の耳も赤くなってる。

カリカリ、カリカリ。

ふと、思っていたよりも耳かきに集中している自分に気づく。最初こそはただの興味本位だったけど、段々と癒されたような顔になっていくとーほくを見ると、もっとやってやりたいという気持ちになる。……もしかしたら、とーほくだから、なのかな。

「音街は、普段誰かに耳かき、してるんですか？」

「いや？ なんで？」

「なんというか、恐ろしいことを言っていたわりには、上手だなあと……」

「へへ、ありがとう」

眠気に襲われているのか、言葉がゆっくりに、途切れ途切れになっ
てきている。

「ちなみに誰にしているとと思った？」

「ふえ、うーん……ついな、とか」

「ついな？ ついなかあ……なんか頼んでも絶対やらせてくれなさそ
う」

「ふふ……たしかに……」

間の長さから察するに、おそらくもう限界なのだろう。きっと、あともう少しでもすれば――

「すー……」

思った通り、可愛い寝息が聴こえてきた。

さて、私の方もあと少しだ。さつさと終わらせてゆつくり寝かせてあげよう。

カリカリ、カリ……

よし、終わり！

耳も綺麗になったところで、起こさないようにそつと片付けを始める。ゴミを捨てようにも動けないため少し難儀したが、意を決したゴミ箱フリースローが見事に決まり、ほつと胸をなでおろした。

少し落ち着いて、改めて膝で寝ているとーほくを見遣る。どうやら可愛いのは寝息だけではないらしい。まあ顔が可愛いなら寝顔も可愛いというのは当たり前だけど。

いたずらら心で、彼女の柔らかかそうなほつぺたをつついてみる。少し違和感を覚えたのか、「んう……」と小さく反応を返した。

その声を聴いた私は、瞬間、彼女を力強く抱きしめたい衝動に駆られた。なんだろう、この感情は。こんな気持ち、今までなかったのに。でも、なんだか知っている気持ちのような気がする。そう確か、可愛い動物やぬいぐるみを前にした時にも――。そこで気づく。

ああそうか、私は、彼女に愛おしさを感じているんだ。

でもきつとこれは、小動物やぬいぐるみに感じるものとはまた違うものだとも思う。だって、今のこの気持ちは、そんなんよりももっと深く、もつとドキドキしているから。

ずつと、なんとなく気づいていた。この気持ちには名前があって、だけど、それに気づかないようにしていた。

でももう、耐えきれないや。私のわがままのためにあなたを起こすのは忍びないから、抱きしめるのは無理だけど。

でも、言葉なら、言葉くらいなら。

「大好きだよ、とーほく」

小さく寝息を立てる彼女に、そつと耳打ちする。せつかく綺麗にしたけど、これじゃ意味ないな。

自嘲しながら、自分も目を閉じる。ずっと寝顔を見ていたら、そのうち言葉だけじゃ足りなくなりそうだ。

おやすみ、とーほく。今度また耳かきしてあげるね。そしたら今度は、綺麗な耳の、起きているあなたに、ちゃんと伝えるから。